
紺色の女

なんかもう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紺色の女

【Nコード】

N0145J

【作者名】

なんかもう

【あらすじ】

電車の中で、私はあの時を思い出す。

電車がガタンゴトンと揺れている。
私はガタンゴトンと揺られている。

もう夜も遅い。電車の中は比較的すいている。席は空いているが荷物がかさばるので座れずにいる。今日はこのままドアに寄りかかって帰ることになりそうだ。

窓の向こうにもう一つの車両がある。外が暗いから鏡のように室内を映しているのだろう。私はその車両の中の一人の女性を見ていた。彼女は何の変哲もない女性。20代から30代ほど。紺色のスーツを着ている。

そう…彼女も確か、そんな紺色のスーツを着ていた。

夜の暗闇に浮かぶ窓の向こうの車両を、5、6歳ほどの少年が駆け回る。

20代後半の若い女性がそれに注意をする。

少年は3人いて、どうやらそのうちの一人の母親らしかった。

ゆうや君のお母さんは僕のお母さんよりも若くてきれいでうらやましい。
僕のお母さんはもうそんなに若くないし上にお姉ちゃんとお兄ちゃんもいる。

授業参観でお母さんたちが教室の後ろにいるときとかも、僕のお母さんよりもゆうや君のお母さんのほうがずっと若くてきれいだった。

僕はゆうや君とは仲良しだ。家が近くて幼稚園も一緒だった。
もう一人、たかし君と一緒にいつも3人で遊んでいた。

かけっこ、鬼ごっこ、砂遊びをしたり鉄棒、テレビゲーム。たまにけんかはするけれど、みんな仲は良かった。

ゆうや君のお母さんは優しく、家に遊びに行くとお菓子やジュースをくれる。たまに車や電車で少し遠くの公園や動物園に連れて行ってくれる。

僕はゆうや君のお母さんが大好きだった。僕のお母さんよりも優しくていいにおいがするし、やわらかくて好き。怒られたって僕をたいたりしない。痛くない。

その日も確か、遊園地に連れて行ってくれたんじゃないかなかったかと思う。

「もう！電車の中ではさわいじゃだめよ！」

ゆうや君のお母さんはそう言うって僕らをしかる。

外はもうゆうぐれ。一日中遊んだってまだまだ僕は遊び足りない。本当は帰りたくななんてないんだけど、遊園地がもうすぐしまっってしまうから、仕方なく帰るのだ。

人のいないスペースを見つけて固まる。

「あの飛行機がブーンってさあ！」

「そうそう！あれすっげえよなあ！！！」

「でもジェットコースター乗りたかったなあ……！」

「あー！もうたかしがもうちょっと背え高ければさあ」

ガタタン！…ガタン…ガタン…プシューー…

手持無沙汰に携帯を弄ぶ。

「あれ？これなんだ？」

公園のベンチの下にキラツと光る指輪が落ちていた。

「へえ…。」

テレビでよく見る。これはきっとダイヤモンドというやつだ。実物

は初めて見る。

僕はそれを公園の中の秘密の場所にしまいこんだ。

「ねえ、指輪知らない？」ある日ゆづや君のお母さんが僕にたずねた。

「指輪？」

「うん。そう。これくらいの」ひとさし指を丸めて小さな丸を作る。「小さな宝石が付いてるの。ダイヤモンド、っていうきらきらした…。」

「…うづん？知らない。」

「…おつかしいわね…」。どこ行っちゃったのかしら…。」

ねえ奥さん。聞いた？最近向かいの高橋さんち…

ああ！聞いた聞いた。そうよねえ…。いっつも喧嘩してるみたいだし…。

そうそう！子供がかわいそうだわ！

でも子供の面倒はすごく見てくれるのよねえ。ほら、うち同い年のがいるからさ、一緒に。

へえ…。じゃあ旦那さんが協力してくれないとか。

そうかもねえ…。ね、私これは本人から聞いたんだけどさ、ちょっと前にきよるきよるしながら道歩いてるからどうしたの、って聞いたのね、そしたらさ、結婚指輪なくしちゃったんだって！

まあ…。普段ならどうってことないだろうけど…こんな不仲の時にねえ。

ホントに離婚しちゃったりして…。

ねえ…。まだ越してきたばかりだって言うのに…。

河原できれいな石を見つけたのでわくわくしてひみつばこを開けた。

「…あれ？」

指輪だ。きらきらした小さな石が付いている。

「これもしかして…。」
指輪をポケットに入れて走る。

「っと!…ゆうや君?」

ブランコで一人さびしげにゆれている。

「どうしたの?」

ゆうや君はこぎながら言う。

「んー…。ちょっと。」

「あ!ねえ」ぼくは隣のブランコに座った。

「あのゆび…」

「あのさあ!」

びっくりした。

「…あのさあ!ぼく、引っ越すするかもしれない!」

ゆうや君はぐんぐんブランコをこいでゆく。

「引っ越し?!なんで?」

「だって母さんのおばあちゃんちは三重だもの。」

「三重?」

「そう!三重!遠いんだ!」

「へえ…。三重!三重!」

馬鹿みたいに繰り返した。三重なんてどこなのかもわからなかったけれど。

「あ!母さん!」

ゆうや君が走ってゆく。

「あら、遊んできたの」

ゆうや君のお母さんはいつもと違って紺色のかっちりしたスーツを着ていた。

なんだか違う人みたいでドキドキした。

「ごめんね、ゆうやもう帰らなくちゃいけないの。ほら、さよならしなさい。」

「ん、バイバイ、ね」

「おー。じゃーな。」

「それじゃあ、さようなら」ゆうや君のお母さんは僕の頭に手を載せて言った。にこつと笑う。

「はい、さようなら。」

手をつないで帰っていく二人の背中。

ポケットの中の感触を思い出した。

「やば…。」

駆け出した、けれど2、3歩歩いてから思いなおす。「まあ、明日で…、いいか？」

指輪をぎゅっと握りしめる。

車内の照明に照らされて小指の指輪がキラツと光る。

手入れはしているものの、もうだいぶ年季が入っている。

プラチナの地金。何カラットかなんて知らないが、通販でよく見る典型的なダイヤモンドの指輪。ピンクリングにするには少し変わっている。

これのせいで私は周りにプロポーズを失敗した男だと思われているらしいがそれは大いなる誤解だ。

だからといってこれが何かを言う気はないが。

ガタン、ガタン、ガタン…

電車が揺れる。

ゆうや君と最後に会ったのはあの日のあの公園だった。

後で聞いた話だけれど、ゆうや君の親は離婚してしまっただらしくてあの日のうちにでもゆうや君のお母さんはゆうや君を連れて三重に帰ったのだそうだ。といってもそのころはまだ別居ということだったらしいのだけれど…。

そして私がゆうや君のお母さんを最後に見たのはそれからだいぶ経つてからの駅のホーム。

向かいのホームに立っていた。あの時と同じ紺色のスーツを着て。

冬の寒がりにトレンチコートを着て、OLのように控え目に着飾っている。そうあのスーツ！

すぐに電車にさえぎられてしまったけれど…、あれはきつとゆうや君のお母さんに違いなかったのだ。

彼女が電車に乗り込んで、私に背を向けて座るのを、私は茫然と眺めていた。心臓が早鐘を打つ。

しかしすぐに電車は動き出して彼女はうつむいて寝る態勢に入る。

ああ…

また渡し損ねた。

電車が揺れる。

私も揺られる。

斜め後ろの彼女の肩がピクリと動いた。

うつむいていた顔が起きだす。寝ぼけてぼつつとしているその顔は、彼女とは似ても似つかない顔をしていた。

(後書き)

「電車」をテーマとして募集していたとあるサイトに投稿するつもりだったのですが、よくみたら著作権が向こうに行ってしまうというところで、まあどうということはないのでしょうか、後で見直してうわああってなったときに困るかも、と思ったのでこちらに投稿することにしました。えへ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0145j/>

紺色の女

2010年10月22日12時08分発行